

災害のとらえ方，（台風12号被害に関する）近隣県の状況を伺って（三重災害支援研究会第1回シンポジウム 紀南地域における台風被害に関する報告 第1報）

著者	成田 有吾
雑誌名	三重看護学誌
巻	14
号	1
ページ	149-150
発行年	2012-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10076/11948

災害のとらえ方、 (台風 12 号被害に関する) 近隣県の状況を伺って

成 田 有 吾

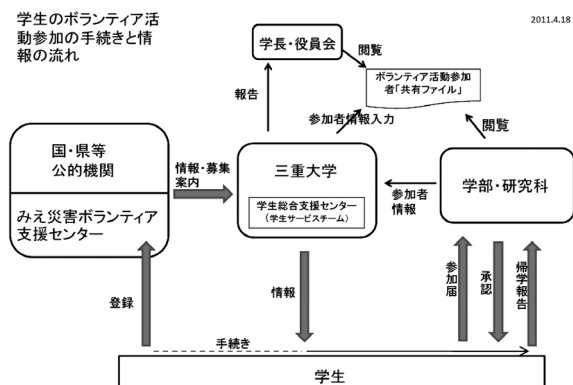
災害のとらえ方

東日本大震災

本学医学部附属病院および医学部職員は、それぞれの専門性を活かした対応を、東日本大震災の当初から参加した。DMAT チーム (3 月 11 日当日～13 日、6 名構成)、内科系&外科系チーム (岩手県陸前高田市米崎コミュニティセンター、3 月 17 日～4 月 29 日までに 8 チーム；3～5 名構成、その後、東海地方大学チームとして 6 月まで継続)、精神科チーム (3 月 30 日～5 月 2 日までに 3 チーム)、警察庁要請法医学チーム：岩手県沿岸警察署管内 (3 月 14 日～4 月 20 日まで、延べ 3 名の法医学者)、臨床心理士チームほか。また、人工呼吸器を装着した難病患者等の遠隔避難受け入れへの準備。発災直後より、日本神経学会、日本難病医療ネットワーク研究会からの養成など、各専門領域で対応した。本学は遠隔地であるため、実際の患者広域担送はなかったが、バックアップ体制を敷いた。

共通するのはコーディネータ役の重要性、とも言えるかもしれない。

学生委員会から



東日本大震災への災害ボランティアへの関わりをめぐっては、学生や一般職員への対応には大学側からルールが提示された (2011 年 5 月 19 日学生委員会)。こ

の内容を理解しておく必要がある。研究会当日にあらためて説明した。

何かあったら問題!のスタンスと災害支援の両立にはさまざまな問題がある。一方、本学においても、ボランティア精神の高い学生、職員あり。一部学生は県知事との討論会にも参加するに至っている。

台風 12 号被害に関する近隣県の状況を仄聞して

台風 12 号の襲来後、水害被害状況の比較的近い時期に紀宝町へ入った。また、紀南病院への非常勤勤務から、Web 上や各種報道の内容より現地での実感を伝える。

奈良県：

12 号台風災害への奈良県医療政策部の対応 (重症神経難病患者へのコミュニケーション支援研修会 10/8 時に伺った)

激甚災害の指定を受けた今回の水害では、DMAT 出動 1 日あまりであった。交通寸断され、三重や和歌山のように海上交通手段もなく、もっぱらヘリによる移動であったことが特徴。

孤立された地区からは薬品不足や精神症状の悪化からの応援依頼あり。十津川担当の保健師は新採用の方 2 名+非常勤 (ベテラン) 1 名で応援が必要だった。県内の保健師、保健所業務もぎりぎりの人数で行っている。また、市町村の保健師業務もさらに tight であることから応援も大変。しかも、陸路で入れない。空路では (海路に比べて) 重量物が遅れないなどの制約があるので苦労した。

今回の台風被害は非常に大きい。明治 22 年の十津川水害とほぼ同じコースを台風が進んだ。当時には即座にわからなかったが、土砂ダムができており、その影響は現在まで続いていた。今回、被災人数は前回と比し非常に少なく済んではいるが、規模は前回と同様、

あるいはそれ以上と考えられている。風屋ダムの発電所がこなごなに壊れているが、これはいずれの報道も伝えていない。あまりに大きすぎる発電装置でクレーンで吊り上げることもできない。いま、小さく破砕する作業を行っている。災害の大きさを全て伝えられる報道はないこと、また、さらに大きな災害復旧が進行途中のなか、相対的に過小な報道となっている可能性もある。

和歌山県：

「支援をお願いします那智勝浦町」

http://wn.com/wakayama_prefecture?orderby=relevance&upload_time=this_month

那智勝浦町の関係者から情報をいただいた。できれば、当日ご参加をお願いしている。

特に公的な活動とボランティア活動。激甚災害指定されるほどの大災害時には迅速かつ公的な支援活動（自衛隊、警察ほか）の重要性。急性期3日は「生きる」ための対応が急務。しかし、3日以降には「生きる」ための対応も加わる。しかし、急性期の対応や単に建造物の復旧だけでは、生活の回復は望めない、もともとの地域特性（過疎、経済停滞、観光嗜好の変化等）に現場ではさまざまな困難もあることを理解しておきたい。

「ボランティア・ツアー」や「ボランティア・ツーリズム」という言葉：英語圏でも10年くらいの歴史しかない。

Lady Gaga says, “We’re doing more harm to Japan by staying away than by going.”

遠隔地でのボランティア活動の多くは1年以上の長期にわたる活動。誰もが簡単に参加できるものではなかった。

ギャップイヤー（学校を1年ほど休んで学業以外の活動をする）が英国を中心に欧米豪州で一般的。ギャップイヤーを取得する若者が遠隔地でのボランティアに数多く参加。数か月から1年以下のボランティア活動を含むツアーが登場（1990年代後半～）。

http://blog.livedoor.jp/shikida_seminar/archives/1356371.html

仄聞した内容ながら、情報提供と問題提起のため、時間をいただいた。

(proceeding November, 2011)